# 後藤丹治博士年譜

明治三十年三月二十八日　三重県宇治山田市（現伊勢市）ニ生ル
明治四十四年四月　三重県立第四中学校入学
大正　五年三月　三重県立第四中学校卒業
大正　六年四月　神宮皇学館本科入学
大正　十年三月　神宮皇学館本科卒業
大正　十年四月　京都帝国大学文学部文学科国文学選科入学
大正　十三年三月　京都帝国大学文学部文学科国文学選科修了
大正　十三年四月　感知県立第一中学校教諭
大正十三年十二月　東京帝国大学史料編纂官補
昭和十年以降三年間　帝国学士院ノ推薦ニヨリ「太平記ノ成立及ビ後世ニ及ボセル影響ノ研究」ニツキテ有栖川宮記念学術奨励賞金ヲ授ケラレル
昭和　十六年四月　願ニ依リ東京帝国大学史料編纂官補ヲ免ゼラル
昭和　十六年四月　立命館大学専門学部教授
昭和　十七年二月　立命館大学文学部教授
昭和　二十年以降　逝去マデ随時、京都女子専門学校、京都女子大学、龍谷大学、大阪市立大学、天理大学、立命館大学、相愛女子短期大学ノ講師兼任
昭和二十六年四月　「雨月物語研究」ニ依リ、京都大学ヨリ文学博士ノ学位ヲ授ケラル
昭和二十七年十月　立命館大学文学部長兼短期大学部文科主任
昭和二十八年四月　立命館大学文学部長兼短期大学部文科主任辞任
昭和二十九年六月　願ニ依リ立命館大学文学部教授ヲ免ゼラル
昭和二十九年七月　大阪学芸大学教授
昭和三十七年十月　大阪学芸大学教授停年退官
昭和三十八年一月　十八日高血圧ノタメ京都府立病院ニ入院ス。精密検査ノ結果余病ナク、静養ニ伴ツテ血圧平常ニ帰シ、全恢シテ二月九日退院トナル。
昭和三十八年四月　皇学館大学教授
昭和三十八年五月　一日午後九時二十五分心臓麻痺ニヨツテ急遽永眠。数ヘ年六十七才。同月三日午前十一時自宅ニ於テ仏式ニヨル葬儀執行。戒名　広文院釈宝誠。

# 後藤丹治博士業績目録

## 著書

一、「戦記物語の研究」　筑波書店発行　昭和十一年一月
二、「太平記の研究」　河出書房発行　昭和十三年八月
三、「中世国文学研究」　磯部甲陽堂発行　昭和十八年五月
四、「改訂増補戦記物語の研究」　磯部甲陽堂発行昭和十九年二月
五、「日本古典文学大系第六十巻　椿説弓張月上」　岩波書店発行　昭和三十三年八月

六、「日本古典文学大系第三十四巻　太平記一」　岩波書店発行　昭和三十五年一月（釜田氏共著）
七、「日本古典文学大系第三十五巻　太平記二」　岩波書店発行　昭和三十六年六月（釜田氏共著）
八、「日本古典全書の内、太平記一」　朝日新聞社発行　昭和三十六年八月
九、「日本古典文学大系第六十一巻　椿説弓張月下」　岩波書店発行　昭和三十七年一月
一〇、「日本古典文学大系第三十六巻　太平記三」　岩波書店発行　昭和三十七年十月（岡見氏共著）
一一、「国文学叢考」　大阪学芸大学国語国文学研究室発行　昭和三十八年二月

## 論　文

○「平家物語著述の資料に就きて」（「芸文」第十四年第四、五、六号）　大正十二年四、五、六月
○「鴨長明伊勢記考」（「芸文」第十四年第十一、十二号）　大正十二年十一、十二月
○「方丈記管見」（「芸文」第十五年第五、六号）　大正十三年五、六月号
○「茂範卿の唐鏡に就いて」（「芸文」第十五年第九号）　大正十三年九月
○「長門本平家と盛衰記との関係」（「芸文」第十五年第十二号）　大正十三年十二月
○「諸書に引かれたる平家物語につきて」（「芸文」第十六年第一号）　大正十四年一月
○「禅中記の研究」（「芸文」第十六年第六号）　大正十四年六月
○「慈心坊と説和と冥途蘇生記」（「芸文」第十六年第七号）　大正十四年七月
○「屋島合戦縁起に就いて」（「芸文」第十六年第十号）　大正十四年十月
○「東関紀行私見」（「芸文第十六年第十一、十二号）　大正十四年十一、十二月
○「日蓮の遺文其他より観たる平家物語」（「芸文」第十七年第一号）　大正十五年一月
○「私が最近に見た秋津嶋物語」（「芸文」第十七集第六号）　大正十五年六月
○「平家物語の註釈及び研究」（「国語と国文学」第三巻第十号）　大正十五年十月
○「海道記の証本と其の成立」（「国語国文の研究」第四、五号）　昭和二年一、二月
○「創始時代の平家琵琶と覚一検校」（「歴史地理」第四十九巻第三号）　昭和二年三月
○「登山状と雑談集」（「東方仏教」第二巻第四号）　昭和二年四月
○「初期の平曲に関する研究」（「国語と国文学」第四巻第九号）　昭和二年九月
○「朗詠百首に就いて」（「国語国文の研究」第十三号）　昭和二年十月

○「宴曲に関する二三の考察」（「国語と国文学」第四巻第十一号）昭和二年十一月
○「新たに知られた小野篁日記」（「国語と国文学」第五巻第十二号）昭和二年十二月
○「異本提中納言と小夜ごろも」（「国語と国文学」第五巻第五号）昭和三年五月
○「延年舞歌詞その他」（「書物の趣味」第二冊）昭和三年五月
○「平家物語難語考」（「国語国文の研究」第二十一、二十八、二十九号）昭和三年六月、四年一、二月
○「藤葉和歌集と小倉実教」（「国語国文の研究」第二十三号）昭和三年八月
○「方丈記研究」（新潮社発行日本文学講座）昭和三年九月
○「方丈記新説」（「国史と国文」第五巻第五、六号）昭和三年十一、十二月
○「平家物語出典の研究」（「国語と国文学」第六巻第二、三、五号）昭和四年二、三、五月
○「馬琴の八犬士と個性描写」（「芸文」第二十年第七号）昭和四年七月
○「若衆や女房を教訓した宗祇の歌」（「国語国文の研究」第三十六号）昭和四年九月
○「源氏一品経と源氏表白」（「国語国文の研究」第四十八号）昭和五年九月
○「両足院本平家物語」（「書物の趣味」第六冊）昭和五年十二月
○「平家花揃という書に就きて」（「言語と文学」第五輯）昭和六年一月
○「小堀氏の駁説を読みて再び源氏供養表白を論ず」（「国語と国文学」第八巻第七号）昭和六年七月
○「平家物語の典拠ある語句につきて」（「月刊日本文学」第二号昭和六年六月
○「平家物語の研究について」（「月刊日本文学」秋季臨時号）昭和六年九月
○「建久御巡礼記を論じて宇治拾遺の著述年代に及ぶ」（「岩波講座「日本文学」付録「文学」）昭和六年九月
○「馬琴の読本と太平記」（「月刊日本文学」第二巻第一号）昭和六年十二月
○「日本文学書目解説室町時代」（岩波講座「日本文学」第十回配本　昭和七年三月
○「平家物語序説」（「皇学」第一巻第一、二号）昭和七年十一月、八年三月
○「平家物語の作者及び作成年代と定説の再吟味」（「国語国文」第二巻第十二号）昭和七年十二月
○「野呂匡氏の海道記と藤原秀能といふ文を読みて」（「歴史と国文学」第八巻二号）昭和八年二月
○「清少納言息女考」（「国語国文」第三巻第二号）昭和八年二月
○「曾我物語に於ける史実の検討」（「国語と国文学」第十巻第四号）昭和八年四月
○「雑考四則」（「文学」創刊号）昭和八年四月
○「岩清水物語は果して宝治文永年間の作か」（「文学」第一巻第

七号）昭和八年十月
○「近古小説と太平記」（「国語と国文学」第十巻第十一号）昭和八年十一月
○「児物語の研究」（「仏教文化大講座」第一回配本）昭和八年十二月
○「「枕草子『小白河』の再検討」（「文学」第二巻第一号）昭和九年一月
○「十二段草子と「平家物語」（「文学」第二巻第二号）昭和九年二月
○「鎌倉時代の仏教文学」（「日本精神文化」第一巻第三号）昭和九年四月
○「近古小説の二三について」（「国語と国文学」第十一巻第五号）昭和九年五月
○「平家を典拠とせる巣林子の語句について」（「国語国文」第四巻第八号）昭和九年八月
○「平家物語の宇治川先陣の説話は果して作者の創作か」（「国語と国文学」第十一巻第十一号）昭和九年十一月
○「方丈記の研究」（「改造社発行日本文学講座第五巻）昭和九年十一月
○「蛇性の婬の成立と源氏物語」（京都大学国文学会廿五周年記念論文集）昭和九年十一月
○「雨月物語に及ぼせる源氏物語の影響」（「国語国文」第四巻第十二号）昭和九年十二月
○「平家物語灌頂巻成立の諸問題」（「皇学」第二巻第四号）昭和九年十二月
○「雨月物語より本朝酔菩提へ」（「宝雲」第十一号）昭和十年一月
○「京伝の読本二種と雨月物語」（「文学」第三巻第六号）昭和十年六月
○「薄雪物語の成立と高野博士説の再吟味」（「立命館文学」第二巻第十一号）昭和十年十一月
○「遊仙窟に就いて吉田氏へ」（「文学）第三巻第十二号）昭和十年十二月
○「笹淵氏の宇津保物語に関する論考を読みて」（「国語国文」第六巻第一号）昭和十一年一月
○「四人比丘尼の成立と原拠」（「文学」第四巻第三号）昭和十一年三月
○「太平記の一研究」（「国語と国文学」第十三巻第四号）昭和十一年四月
○「雨月物語雑考」（「国文学解釈と鑑賞」第一巻第二号）昭和十一年七月
○「篁物語新考」（「国語国文」第六巻第十号）昭和十一年十月
○「遊仙窟・新様府・仏祖三経」（「国語国文」第七巻第三号）昭和十二年三月
○「太平記概説」（「国文学解釈と鑑賞」第二巻第三号）昭和十二年三月
○「弓張月の白峯について」（「国文学解釈と鑑賞」第二巻第五号）昭和十二年五月

○「馬琴の読本石言遺響について」（「図書館雑誌」第三十一年第七号）昭和十二年七月
○「吉野の哀史＝太平記について―」（「むらさき」第四巻第十一号）昭和十二年十一月
○「馬琴雑俎」（「日本古書通信」第九十号）昭和十二年十一月
○「太平記と武士道精神」（「国文学解釈と鑑賞」第二巻第十二号）昭和十二年十二月
○「御伽草子と後代文学」（「国文学解釈と鑑賞」第三巻第三号）昭和十三年三月
○「日蓮聖人御遺文と平家物語」（「立正史学」第十号）昭和十三年三月
○「読本三種考証―桜姫全伝、月氷奇縁、阿古義物語―」（「国語国文」第八巻第四号）昭和十三年四月
○「室町時代文学の研究について」（「古典研究」第巻第六号）昭和十三年五月
○「雨月物語管見」（「国漢」第四十九号）昭和十三年七月
○「木石余譚考証」（「日本文化」第十六号）昭和十四年四月
○「読本考証読説」（「国語国文」第九巻第五号）昭和十四年五月
○「太平記原拠新考」（富山房発行本邦史学史論叢上巻所収）昭和十四年五月
○「平家物語成立考」（「史学雑誌」第五十編第六号）昭和十四六月
○「六代勝事記を論じて承久記の作成問題に及ぶ」（「文学」第七巻第七号）昭和十四年七月
○「平家物語文章私見」（安藤教授還暦祝賀記念論文集）昭和十五年二月
○「承久記概説」（「歴止と国文学」第二十二巻第五号）昭和十五年五月
○「再び室町時代文学の研究について」（「古典研究」第五巻第十二号）昭和十五年十月
○「曾我物語に関聯して」（「古典研究」第五巻第十三号）昭和十五年十一月
○「平家物語著述年代考」（「史学雑誌」第五十二編第十、十一、十二号）昭和十六年十、十一、十二月）
○「馬琴の読本と雨月物語」（「立命館大学論叢」第四輯）昭和十七年三月
○「京伝其他の作家の読本と雨月物語」（「立命館大学論叢」第八輯）昭和十七年七月
○「五雑俎と雨月物語」（「歴史日本」第一巻第六号）昭和十七年十二月
○「垣根草の鞆晴京の話とその展開」（「立命館大学論叢」第十五輯）昭和十八年八月
○「高倉院升遐記について」（「日本諸学研究報告」第二十篇国語と国文学）昭和十八年九月
○「古典文学の註釈的研究への三つの態度」（「立命館文学」第六十一号）昭和二十二年七月
○「雨月物語と本朝神社考との関係」（「立命館文学」第六十四号）昭和二十三年三月

○「雨月物語札記」（「民族短歌」第七十三号）昭和二十三年六月
○「雨月物語割記」（「国文研究」第一輯）昭和二十三年六月
○「范張雞黍の故事と日本文学」（「立命館文学」第六十五号）昭和二十三年六月
○「読者雑誌―六代勝事記と石清水文書―」（「国語国文」第七巻第四号）昭和二十三年七月
○「雨月物語青頭巾の一典拠」（「国語国文」第十七巻第七号）昭和二十三年十月
○「滝口入道統説」（「洛味」復刊第三集）昭和二十五年四月号
○「読書雑誌―遊京漫録と馬琴―」（「国語国文」第十九巻第二号）昭和二十五年十月
○「京仏の読本二種と雨月物語との関係」（立命館創立五十周年記念論文集文学篇）昭和二十五年十月
○「源氏の宇治の巻ということについて」（新註国文学叢書「月報」第十号）昭和二十五年十一月
○「三国妖婦伝について」（「説林」第三巻第一号）昭和二十六年一月
○「京伝の読本安積沼と雨月物語との関係」（龍谷大学国文学会「国文学論叢」第三輯）昭和二十六年七月
○「万葉集と雨月物語」（「立命館文学」第八十三号）昭和二十七年四月
○「夢応の鯉魚の原拠」（「国語国文」第二十一巻第九号）昭和二十七年十月
○「中国の典籍と雨月物語」（「国語国文」第二十一巻第十一号）昭和二十七年十二月
○「秋成の旧作と雨月物語―世間猿、妾気質の再現―」（「国文学」第九号）昭和二十八年一月
○「雨月物語研究」（文学、哲学、史学学会連合会発行「研究論文抄録誌」3）昭和二十八年三月
○「剪燈新話と雨月物語との関係」（「立命館大学人文科学研究所紀要」第一号）昭和二十八年五月
○「雨月物語の成立と剪燈新話」（「国語国文」第二十二巻第七号）昭和二十八年七月
○「蛇性の婬の成立と源氏物語」（「立命館文学第一〇四号）昭和二十九年一月
○「雨月物語典拠新考―中世の作品三種について―」（「論究日本文学」創刊号）昭和二十九年七月
○「横笛」（桑名文星堂刊「物語の女性」所収）昭和二十九年九月
○「滝口入道雑俎」（「洛味」第六十四集）昭和二十九年十月
○「雨月物語と伊勢・今昔との関係」（龍谷大学文学会編「国文学論叢」第五輯）昭和三十年十一月
○「雨月物語白峯の諸典拠―保元物語から白峯寺縁起まで―」（「立命館文学」第一三〇号）昭和三十一年三月
○「英繁二書と雨月物語との関係」（「国語国文」第二十五巻第三号）昭和三十一年三月
○「註釈―弓張月の註釈に関聯して―」（「平安文学研究」第十九輯）昭和三十一年十二月
○「平家物語の参考文献」（角川書店発行「古典鑑賞講座」第十一

巻）昭和三十二年六月
○「雨月物語原拠新考」（「学大国文」第一号）昭和三十三年一月
○「雨月物語出典をさぐる」（「国文学解釈と鑑賞」第二十三巻第六号）昭和三十三年六月
○「雨月物語と太平記との関係」（「学大国文」第二号）昭和三十三年十二月
○「平家物語の諸問題」（「至文堂発行「国文学論叢」第二輯）昭和三十三年十二月
○「六代勝事記私見」（「国文学」山脇博士古稀記念特集その一）昭和三十四年十月
○「雨月物語出典・叢考―謡曲・江談抄・証道歌・後拾遺集との関係―」（「龍谷大学国文学会編「国文学論叢」第七輯）昭和三十五年一月
○「椿説弓張月補考」（「学大国文」第三号）昭和三十五年二月
○「雨月物語の原拠二種について」（「学大国文」第四号）昭和三十六年二月

昭和三十八年九月二十五日印刷
昭和三十八年九月三十日発行
定価　百五十円

論究日本文学　第二十一号

編集兼発行者　立命館大学日本文学会　森本修
印刷所　京都市下京区七条御所ノ内中町五〇　中村勝治
発行所　京都市上京区河原町通広小路西入ル　立命館大学日本文学会

本会への**入会申込・会費の払込**はすべて左記へお願い致します。

**入会金**　五拾円
**会費**　一年四百円（四回分納も可）
京都市西陣局区内
河原町通広小路西入ル
立命館大学文学部内
**立命館大学日本文学会**
振替　京都三八八三番